

酪 農 試

酪農研究通信

第28号 2020年5月



酪農試における放牧試験



地方独立行政法人

北海道立総合研究機構

農業研究本部 酪農試験場

北海道標津郡中標津町旭ヶ丘7番地

TEL(0153)72-2004 FAX(0153)73-5329

<巻頭言>

酪農試験場の果たすべき役割

酪農試験場長 大坂 郁夫

地域対応場として親しまれてきた「根釧農業試験場」という名称は、平成 30 年度に全道の草地酪農研究の中核拠点として酪農試験場に改称されました。時代の流れにともない、名称だけでなく酪農試験場の果たすべき役割も変わる時期に来ています。

これまで酪農研究は、飼養規模拡大、生産性の向上(一頭当たり乳生産量、単位面積当たりの草量)を目指して、研究分野ごとに技術開発を行い、一定の成果を示してきました。一方で労働力不足や、輸入穀類飼料への依存による経営の不安定さ、栄養のアンバランスに起因した疾病率増加および繁殖率の低下が大きな問題となっています。今後は、飼料生産と飼養との関係、飼養や施設と疾病や繁殖との関係等、横断的な研究や、これらの成果を基に、IoTなどを活用することが、より需要であると認識しています。

酪農は、他の家畜(肉牛、豚、鶏)と比較して、地域飼料基盤(=粗飼料)の依存割合が高い産業です。北海道の酪農家戸数は 5,970 戸(令和元年 北海道の酪農・畜産をめぐる情勢)ですが、8 割以上が道東(十勝、根釧、オホーツク)と道北(宗谷)に偏在しています。これらの地域で見ても、気候や土壤の違いにより、安定的に収穫できる飼料作物や草種は違います。また、毎年 200 戸程度の酪農家戸数が減少していますが、その大半は飼養規模の小さい酪農場です。中小規模の酪農場割合が多い地域ではコミュニティの崩壊が危ぶまれ、大規模化した酪農場が少数あるよりも、中小規模の酪農家が多い方が望まれます。このように、北海道でも地域の飼料基盤が異なれば主体となる自給飼料や乳量水準は異なりますし、乳量水準や飼養規模が異なれば必要な技術も異なります。

これからの酪農試験場の研究は、土・草・牛それぞれの分野についてニーズに応じた技術開発することに加え、「北海道型酪農とは自給飼料主体で飼養すること」、という考え方を、もう一步発展させる必要があります。具体的には、地域の風土に合った主幹粗飼料の選択と品質・生産性の向上や新規飼料の可能性に関する研究、地域の飼料基盤を最大限活用して、繁殖性向上、疾病低減に主眼を置いた牛群単位(=農場単位)で乳生産を向上させる研究、そして最終的には、飼養形態に合わせた技術の選択と経営評価をパッケージで提案し、関係機関と連携しながら生産現場に定着させる、ということも重要な役割となるでしょう。

酪農試験場において、令和元年度にとりまとめた研究成果および研究情報の要約と、試験場が主催した主な行事を掲載しました。酪農の生産・普及・行政の現場でご利用下さい。

第 28 号 目 次

令和元年度の研究成果

1. 初産牛の乳量を高めよう 1
(乳量向上のための初産分娩後の適正体重および初産泌乳期の栄養水準)
2. 放牧経験のない育成牛は放牧前に寒冷馴致をしましょう 3
(公共牧場における乳用育成牛の寒冷馴致技術)
3. 草地更新前のライ麦栽培で飼料を確保! 5
(道東地域における牧草夏播種年の飼料収穫量向上のための秋まきライ麦栽培法)
4. 播種後の天候がポイント! 飼料用とうもろこしの効果的な窒素施肥 7
(播種後の気象推移に対応した飼料用とうもろこしの窒素分施対応)
5. 簡易更新法および完全更新法により更新した草地の生産性 9
(更新初期の牧草生産性に対する簡易草地更新の効果)
6. チモシー採草地に対する「セラコート R」を用いた早春全量施肥の効果 11
(チモシー採草地に対する被覆尿素肥料「セラコート R」を用いた早春全量施肥の効果)

令和元年度の研究情報

1. 産子の卵巣予備能と母体環境の関係 13

令和元年度的主要行事 15

酪農試公開デー、第32回酪農試験場フォーラム

詳しい情報や内容に関するお問い合わせは、各担当者にお寄せ下さい。この資料中の成果名は要約版です。お問い合わせ・検索にはカッコ書きした(課題名)をご利用下さい。これまでの研究成果については、インターネットで情報を提供しています。併せてご活用下さい。

◆酪農試験場 (<http://www.agri.hro.or.jp/konsen/konsen1.html>) から「研究成果」を選択

◆農業技術情報広場 (<http://www.hro.or.jp/list/agricultural/center/index.html>) から「研究成果」を選択